

協同組合の祖・大原幽学に学ぶ ——農家存続に向けていま考えてみたい論点——

千葉農村地域文化研究所 飯塚里恵子

私たちは2015年10月17日に、大原幽学が晩年に農村指導にあたった長部(現千葉県旭市)で「千葉北総地域と暮らしと農のこれからを語り合おう—大原幽学の実践から学んで—」と題して、地域有志30人ほどの小さな勉強会をした。

その私たちの勉強会開催のひとつのきっかけにもなったのだが、昨年9月には改正農協法が公布された。今回の法「改正」は13年に安倍内閣下で設置された規制改革会議でのJA中央会不要論・全農株式会社化論等が大きく反映され、農業の市場競争主義に、より傾倒するものとなった。

今年も田植のシーズンを迎えたが、私の家の前に広がる田圃ではどこでも田仕事がされている。そんな農家の姿を見れば、農業の主体者はまず農家であるということをつくづくと感じる。農協はこれまで、そんな農家のあり方を協同原理の基礎として支えてきたはずなのに、今回の農協改革ではそこがすっかりと骨抜きにされてしまったようで、私としては今回の一連の出来事が農協の協同原理を揺るがす大きな事件として感じられた。そういった想いも胸にあったため、いま改めて協同組合の祖ともされる大原幽学の現代的意味について本稿で考えてみたい。

1 農家を尊敬し、農家に愛された大原幽学

幽学といま改めて向き合ってみて、ここに特記しておきたいことはふたつある。ひとつは、幽学と農家とが築いた尋常ではない信頼

関係のあり方についてである。もうひとつは、幽学が自らの命を捨ててまで守ろうとしたのは一家総出で営む農家の暮らしであったということについてである。

幽学は、江戸時代末に関西地方の武家に生まれ、わけあって放浪の人となったと言われているが、彼は生涯の最後まで武士という人格を持ち続けた。幽学が生涯身につけていたという短刀には「難舎者義也(捨てがたきは義なり)」と自刻していたというが、その言葉を貫いて、義(人の正しい道)に生きようとした人だった。

幽学は同時に、北総地域各地の窮乏村の農家から絶大な支持を受けた極めて在地的実践的な農村指導者でもあった。その意味では、幽学の農村での生き方は武士を越えており、幽学はひとり人間として農家と向き合い続けた人だった。

幽学と農家とが築いた関係は尋常ではない。武士として生きた幽学が農家の心を掴んだのは、幽学が徹底して百姓と対話し続けたからだと思う。幽学は農家という生き方を、百姓という人を愛おしく感じていたに違いない。その愛情は上から見下ろすものではなく、農家とはこんなにも立派に生きている人間なのだとして尊敬するものだった。

さらに幽学は北総地域の風土を見つめて、そこからこの地にあった農業のあり方や技術とは何かを考え深めた。幽学は愛と尊敬の念をもって百姓とこの地の土に接したから、百姓は幽学を受け入れた。

幽学は農家だけを見つめて、そして長部の土地と農の営みだけを見つめて、その幸せと豊かな展開をのみ望んだ。現在をのみではなく、未来の幸せをも本気で望んだ。そのために全身全霊をかけて現在の農家の暮らしと農のあり方を改善することが、幽学にとっての生き方だった。

当時の幽学の取り組みは、最終的には幕府に弾圧され、再び村にもどった幽学は取り組みを再開することなく、失意のなかで自害を選んだ。幽学が何より残念だったのは、幕府から嫌疑を受けたことではなく、親愛する農家との歩みを絶たれたことだった。

2 家族で営む農業だからこそ未来がある

幽学が長部の農家と共に実行した取り組みには、最も有名な先祖株組合や谷津田の耕地整理、そして集落の各家の移転整備などがある。いまから見ても大事業である。さらには、前の晩に次の日の作業予定等を家族で話し合う宵相談や、その基礎となる農事予定表の作成、各家の子供が他家で数年を過ごす換子教育、食器などの日用品の共同購入や、もち米の高価だった当時にうるち米を工夫して美味しく食べる方法を考案した性学餅などが知られている。

これだけのことを、長部では農村がまとまり納得して本当に行なったのだ。そしてその取り組みや心は、150年以上が経ったいまでも語り継がれ、引き継がれているものもある。その理由は、当時の北総地域が利根川舟運で江戸や全国とつながり経済的・社会的に最も輝いた時代に、一方でそうした商品経済社会に圧迫された農家の窮地があったということは確かである。しかし、それだけではなかった

だろう。幽学の語りには打ちひしがれた農家の心を動かす夢があった。そして、その夢の多くは、幽学が思いつきで語ったのではなく、実際に農家がそうしたいと考えていたことや、先進農家がすでに行なっていたことを、幽学がしっかりと着目して意味づけたものだった。

長部の農家に指導を乞われ招かれた幽学は、そこで貧しさのなかに荒んでしまった農家の現状を見て嘆いた一方で、素晴らしいと感じる農家の姿をもきくと多く目にしたのだった。そしてそんな農家のために自分が役立ちたいと考えた。だから幽学はそれまでの放浪生活から長部の地に足を着けようとした。

幽学の指導の目標は、農家(農業を営む家族)が真面目に生きることであり、その真面目な農家が暮らし続けることのできる農村を築くことにあった。つまりそれは家族単位で営む農業を守るということであり、小農の営みを守るということであった。

そして、それをより教訓的に言えば、親や先人を敬い、子の未来を拓くことだった。だから農事予定は先人の知恵に学び、換子教育に現われたように子のしつけにも力をいれた。ひとつひとつの実践には、農家自らの真剣な暮らしの論理が込められている。農家とは実に真面目で勤勉な存在であり、実践を成し遂げる主体なのだ。幽学はこういう農家という存在を愛し、全てを捧げた。

現代に立ち返って、農村を見渡してみれば、いままさにこの農家が農業を続けられなくなってきているということをひしひしと感じる。しかし私たちは、だからといって諦めるわけにはいかない。いまこそ私たちは農家に学び、農村で共に生きていくべきだと思うのである。

(いづか りえこ)